

2026 年度 特待入試

第 2 回

国 語

[注意事項]

- 1 問題は一から四までです。
- 2 時間は 50 分です。
- 3 下敷きおよび電算機つきの時計の使用を禁止します。
- 4 解答は、濃くはっきりと書くようにしてください。
- 5 開始の合図があるまで問題用紙を開かず、手を触れないでください。
- 6 試験中はよそ見をせず、きちんとした態度で行ってください。
- 7 何か物を落としたら、黙って手をあげてください。
- 8 他の受験生に迷惑となるような行為をしないでください。

一次の文章の筆者は、二才のころ耳が聞こえにくいことがわかり、小・中学校は地元の普通学校に通いましたが、高校でろう学校に進学し、手話と出会いました。これを読んで、後の問いに答えなさい。

① 幼いころ、ぼくは手話を否定していました。

母は、息子が聞こえないとわかったとき、家の近くにあった「きこえとことばの教室」へまず相談に行きました。そこで出会った先生が、「聴覚口話法」を推奨する人でした。

聴覚口話法とは、聴覚障害のある子どもが、補聴器や人工内耳を活用して残存聴力を最大限に使い、口の動きを見て相手の言葉を理解し、自分の声で話すための訓練をおこなう教育方法です。

ろう学校に行ったほうがいいのかという母の相談に対し、その先生は「手話を覚えるのはやめなさい。犬のようにしか話せなくなるし、知能も犬並みになりま

す」と答えました。

約四〇年前ということを考慮しても、擁護のしようがないひどい発言です。子どもが聞こえないとわかったばかりで動揺している母の「子どもと話したい」という

A 願いにつけこんだ脅しとも言えます。

ただ当時の教育では、「聴者のように話せて聞こえるようになるには、手話を使ってはいけない」と信じられていました。手話を覚えることで音声言語の習得が妨げられるとされていたのです。両親もまた、ぼくの未来の可能性を信じて、この方針に従いました。ぼく自身も、手話を覚えないことが「頑張っている証」だと信じるようになりました。

それから補聴器をつけて、音声だけでコミュニケーションができるようになることを目指した訓練が始まりました。厳しい訓練でした。自分では正しいかどうかもわからない「きれいな発音」を求められる日々が続きます。幼いころの記憶は、この訓練のせいではほとんど残っていません。

ぼくたちはそれぞれ、違う個性や特徴を抱えています。しかし、多数派が自分の考えや、自らの言葉を絶対視するとき、少数派は自分の気持ちを多数派に受け入れられやすい形に合わせて表現することがあります。多数派が自らの特権性を自覚しないとき、少数派は自分の言葉で話す権利を奪われてしまうのです。

それでも、奪われた声は消えてしまうわけではありません。声や言葉は、それでもなお、その人の命と等しいものとして残り続けます。たとえ、一時的に奪われたとしても、声の源は、必ずその人の奥底で生き続けています。

心の奥に閉じ込められた自分の言葉が、再び生き始めるきっかけとなるのは、「ことば」の存在です。

手話との出会いは、人生を大きく変えました。

普通学校に通っていたときは「おはよう」という短い挨拶ですら苦勞していたのに、手話だとすんなり伝えることができました。相手からの「おはよう」も、す

るりと伝わってきます。

「おはよう。今日は一時間目が数学のテストだね」

「おはよう。そうだった、テストがあるんだった!」

「結構、範囲はんいが広いけれど、勉強できた?」

「ははは、まさか。昨日は部活のサッカーで疲つかれてすぐ寝ねちゃったよ!」

「ぼくもそう! 遊びまくってすぐ寝ちゃった。困ったな」

「まあ、大丈夫。大丈夫。なんとかなるだろう」

何気ない会話です。ですが、この会話は、言葉が言葉呼び、言葉が交わるコミュニケーションとして成り立っています。これが筆舌ひつぜつに尽くしがたいほど嬉うれしかったのです。「ぼくは、まだ生きられる」と思ったほどでした。

ろう学校での高校生活は、こうした B やりとりの一つひとつを噛かみしめながら過ごしました。

「言葉は耳で聞くものだと思っていたけれど、目で聴きく言葉もあった」

この認識の転換てんかんは、世界が一変するほどに大きなものでした。

② 手話は、ぼくにとって恩人ならぬ「恩言語」と呼ぶにふさわしいものです。

一六歳になって初めて、本当の意味で人と心を通わせるコミュニケーションを知りました。ずいぶん遅いスタートだったので、経験不足からくる失敗も多々ありました。本で読んだ知識だけで会話をするところもあったため、相手の言葉を柔軟じゅうなんに受け止められなかったりと、頭アでっかちな部分もありました。

高等部を卒業したあとの二年間は、同じろう学校の専攻科せんこうに通っていました。専攻科は、ろう学校高等部を卒業後、就職に向けてより専門的な知識や技術を身につけるところです。

専攻科では、就職に役立つような資格をいろいろ取得しました。ワープロ検定、簿記検定ぼき、英語検定などです。そうした勉強をしながらも③「また聞こえる人ばかりの社会もじに戻らなきゃいけないのか」と暗い気持ちでした。五年間ではまだ言葉に対する傷は癒えていなかったのです。

手話を自分の言葉として働くイメージが持てないこともあったのでしょう。成人して一人で生活する自分の将来像が思い描えがけませんでした。

この時期に、現在の妻となる、まなみと交際を始めました。まなみは家族がみんなろう者のデフファミリー育ちです。手話のネイティブなので、本には載のっていない手話表現をたくさん教えてもらったりしました。

手話によるケンカも、まなみと初めて経験しました。

それまでのぼくが経験してきたケンカは、音声で一方的に言い負かされるものでした。激情のままに発せられる音声は、とても聞き取れるものではありません。聞き返すことも、言い返すこともできずにいると、「わかっていない」「反省していない」「話を聞いていない」と受け取られてしまいます。たまらず手が出てしまうこともありましたが、口のたつ相手の言い分だけが通り、ぼくが一方的に悪者にされてしまいました。

ケンカというと、自尊心がボロボロになるだけの屈辱的なものでしかありませんでした。

そうしたケンカしか知らなかったため、ぼくもまた同じ過ちを繰り返しました。自分よりも力の弱い存在に向けて、一方的に言いたい放題の C ケンカをしかけていました。何も言えず、耳をつぐむ相手の姿を見ることに、淀んだ快感を覚えていました。

勝敗を決めるために、人格を攻撃して、誹謗中傷を放つのが「ケンカ」だと考えていました。現代の偏った意味合いで使われる「論破」と近いかも知れません。相手を打ち負かすこと、議論で優位に立つこと、さらには相手を黙らせるといった意味合いで使われる「論破」を求めていくと、自分にとって都合のいい問題解決に向けて、性急に答えをまとめようとしてしまいます。

④ 相手を尊重せず、一方的な「言葉」を投げつけると、「ことば」の土壌を無視した「言葉」だけのやりとりになります。そうすると、相手の様子や沈黙、戸惑いのような、言葉の奥にある気持ちや背景を察知する余地がなくなり、主張や命令のぶつかり合いになってしまいます。自己本位で一方的に言葉を押しつけても、何も生まれません。

ですが、まなみとのケンカは「言葉」だけではなく、ぼくの背負ってきた歳月や想い、ふるまいといった、その人の歴史を含んだ「ことば」を認めたうえで、時間をかけながらお互いの意見を交えていくとするものでした。

まわりくどく、時間がかかってイライラすることもありますが、最終的には、ぼくを一個の人格ある存在として見なすことを諦めないまなみの姿勢に心を打たれました。

かりそめの論破をいくら積み重ねようとも、一人の言葉に心を傾け、まっすぐ受け止めようとする者の凄みに、かなうはずもありませんでした。

「相手の言葉も、私の言葉も、等しく価値がある。時間をかけて、お互いに言葉を重ねながら、世界が新たに拓かれる関係をともに育んでいく」

こうして言葉にしてみるとなんと当たり前でありながら、なんと D おこないなのだろうと思わされます。

まなみとのケンカを通して、言葉を積み重ねていくこの意味を知りました。

「言葉」として表に現れる一つひとつには、その人が歩んできた時間や出来事が宿っていて、そうした「ことば」に触れるには、時間をかけるしかない。

そうした図式をイメージできるようになってから、ぼくは性急に意味のある言葉だけを求める姿勢に歯止めをかけることができました。

高等部の三年間は、人間関係の失敗をたくさん経験しながらも、積極的に会話を重ねて手話の語彙を増やすことに明け暮れていました。専攻科の二年間は、手話を通して培った「言葉」から、人間の心の機微や、人間の存在に深みをもたらす「ことば」について理解し始めた時期だったのだと、今振り返ってみて思います。

齋藤陽道『つながりのことば学』より

＊ろう学校……耳が聞こえにくい人や、聞こえない人が通う学校。

＊ネイティブ……その言葉を赤ちゃんのころから自然に使っている人。

＊機微……表面だけからはわからない、微妙な事情や心の動き。

問一——部①「幼いころ、ぼくは手話を否定していました」とありますが、なぜですか。その説明としてふさわしくないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 母が相談に行った「きこえとことばの教室」の先生が、聴覚口語法を脅しまじりに強く勧め、母もその方針を受け入れたから。

イ 当時の教育では、聴覚障害のある子どもが手話を覚えると、聴者のように話したり聞いたりできなくなると信じられていたから。

ウ 筆者の両親が、筆者と音声言語で話せるようになるかもしれないという希望を持ち、筆者もその思いにこたえようとしていたから。

エ 音声だけでコミュニケーションをとることを目指した厳しい訓練のために、幼いころの記憶がほとんど残っていないから。

問二——文中の

 に適する語を、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ささやかな イ 絶対的な ウ 崇高な エ 切実な オ 挑発的な

問三——部②「手話は、ぼくにとって恩人ならぬ『恩言語』と呼ぶにふさわしいものです」とありますが、筆者が手話に恩義を感じているのはなぜですか。説明しなさい。

問四——部ア～エの中から、表現に誤りがあるものを一つ選んで記号で答え、正しい表現に直しなさい。

問五——部③「『また聞こえる人ばかりの社会に戻らなきゃいけないのか』と暗い気持ちでした」とありますが、筆者がこのような気持ちになったのは、「聞こえる人ばかりの社会」が筆者にとってどのような場所だからですか。次の（ ）に入る形になるように、これより前の部分から十八字で抜き出し、最初と最後の三字を答えなさい。

（ ） 場所。

問六——部④「相手を尊重せず、一方的な『言葉』を投げつけると、『ことば』の土壌を無視した『言葉』だけのやりとりになります」とありますが、筆者は本文中で「言葉」と「ことば」をどのように使い分けていますか。その説明として適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「言葉」は主に音声言語でコミュニケーションするものであり、「ことば」は音声を使わず、主に手話でやりとりするものである。

イ 「言葉」は音声や手話などで自分の思いや考えを表現するもので、「ことば」はさらに言葉の奥にある、その人の想いや人生も含むものである。

ウ 「言葉」は相手を打ち負かすために一方的に投げつけるだけのものであるが、「ことば」はおたがいのことを思ってやりとりするものである。

エ 「言葉」はその人の人生が宿る、価値のあるものであり、「ことば」はそれほど価値がないものの、人生に深みをもたらすものである。

問七「けんかするほど仲がいい」という言葉は、おたがいに言いたいことを言い合える、えんりょのない関係性であることをいいますが、この言葉に新しい意味を加えるとするなら、どんな意味が考えられるでしょうか。本文中のまなみのケンカに対する姿勢がどのようなものであったかをまとめた上で、答えなさい。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

デジタルデトックスのすすめ

①「デジタルデトックス」という言葉があります。これは、デジタル機器をいったん生活から遠ざけてみるという意味です。もともとデトックス(detox)とは体内の有毒物質(toxin)を外に出すということですが、アルコール依存や薬物中毒の治療を表す言葉として使われるようになりました。デジタル機器への依存についても同様で、メールやSNSへの対応に振り回される日常から自分を解放してみると、リフレッシュできることでしょう。

スマホに費やす時間が多ければ多いほど、家族や友人と話す時間が減ります。せっかく目の前に大切な話し相手がいるのに、双方で下を向きながらスマホの画面に見入っているのは、昨今よく見られる光景です。それに、スマホの通知やSNSの返事が気になれば、会話や仕事にも気が乗らなくなってしまいます。スマホを手放せなくなれば、自分の身の回りのこと以上に、SNSを介した世間体や評価のほうになるかもしれないのです。

SNSや合成AIの利用が及ぼす影響について本格的な議論がなされないまま、利用が野放しになっています。チョムスキーが「AIは我々の倫理を貶める」と述べたことを第1章で紹介しました。それではなぜ、AIが倫理の問題に関わるのでしょうか。

合成AIを使って文書や作品を仕上げた場合、どこまでが摂取した外部情報で、どこからが自分の創作かという線引きは、正当な引用と比べて曖昧です。作文やレポートであれ、芸術作品であれ、自らの能力を詐称したり、原作者のアイデアを傷つける形で利用したりすることは、倫理的に許されません。盗用や剽窃がすべて人の手によるものなら責任の所在は明らかですが、合成AIの悪用では当人の罪悪感という心理的負担が軽くなる恐れがあります。【ア】

合成AIを教育に利用しようとする意見も根強くありますが、それはトレーニングの段階から自分の頭をできるだけ使わないように仕向けるわけですから、スポーツにおけるドーピングのようなものです。【イ】

将棋の棋士が研究用にAIを使うといっても、初心者や中級者が使えば強くなるというものではありません。毎回のように自分の思いつきもしない「次の一手」を提示されても、その先の手を自力で続けて指すことはできませんから、実戦では全く役立たないのです。英文和訳や英作文で翻訳ソフトや合成AIを使うのもこれと同じで、英語の力が身に付くどころか、AIに頼りきりになるのが関の山でしょう。【ウ】

デジタルデトックスの最大の効用は、自分の実力と真に向き合う機会を得ることです。未熟な人にはそれが怖く感じられるでしょうが、そこをおろそかにして成長は望めません。まして、AIを使うことで自分が賢くなったと勘違いするのは深刻な自己欺瞞であり、自らの規範に対する明確な倫理違反でしょう。デジタルデトックスとは、自分の人間らしさを取り戻す機会でもあるのです。【エ】

日本の若い人は「自己肯定感」に乏しいと言われます。海外と比較した青少年に対する調査でも、日本の若者の自己肯定感の低さが繰り返し指摘されてきました。

A 国立青少年教育振興機構などによる「高校生の進路と職業意識に関する調査報告書―日本・米国・中国・韓国の比較―(2023年6月)によれば、「自分

はダメな人間だと思うことがある」という項目に「そう思う」と回答した高校生が日本では8割弱もいたのに対し、米国・中国・韓国では半数程度でした。その一方、「自分にはどのような能力・適性があるか知っている」という項目には、「そう思う」が日本では半数程度なのに対して、米国、中国は7割、韓国は6割でした。自己肯定感は、「自分の能力や適性を活かして、夢を実現したい」という自己実現の欲求に支えられており、「他者から認められたい」という願望（「承認欲求」と呼ばれます）から一歩進んだ段階と考えることができます。

合成AIはほとんどの問いかけに対して、常に「イエスマン」として振る舞うように作られています。それは、承認欲求や自己実現欲求を満たすように回答を調整しておけば、利用者が喜ぶからです。子どもが対話風AIにほめられて喜んだという話を聞いたことがあります。何とも罪作りな話です。

AIは利用者に使用を続けさせることを最優先としてデザインされていますから、利用者に反論したり、だめ出しをしたりするようなことは基本的にないのです。その意味では、AIは徹頭徹尾、利用者の奴隷（どれい）のように振る舞うわけで、それはそれで恐ろしいことではありませんか。

自分の考えに自信が持てないと、^③ 本願で「正解」を手に入れたくなります。そのような人は合成AIの餌食（えじき）になりやすいと言えます。なぜなら、たとえベストの答えでなくとも、それが「正解」だと信じたという気持ちで、疑うというまっとうな思考を退けるからです。

B 自分の夢が実現するかどうかを対話風AIに相談したとしましょう。そのような相談をした時点で、夢の実現を信じたという気持ちが勝っているわけですから、AIの返す甘い言葉は自分の期待を膨（ふく）らませてくれることでしょう。結局そうやって、自分の不足な能力に対して目をつぶってしまうことになります。

1 そこでも、「時間さえあれば、AIに頼らなくとも自力でできるはず」という甘えからも逃れられません。

2 さらに言えば、自分にとって目先の重要な問題（たとえば作文の課題）に対しても、自力での解決を先送りして、合成AIの出した答えを安易に受け入れてしまうことになります。

3 このようにして、ゆがんだ自己肯定感が助長されていくのです。

合成AIの濫用（*らんよう）は、さらに人と関わることを避（さ）けるように働きます。他人からの正直な意見は耳が痛いものですし、「自分のことを理解してくれるのは合成AIだけだ」などと錯覚（さくかく）してしまったり、現実の人間関係をできるだけ遮断（しやだん）して自分の殻（か）に閉じこもることになります。ですから、合成AIが内向的（*けいこう）な傾向のある人たちの「コミュニケーション・ツール」として役立つというのは大きな誤解（ごかい）です。極端（きょくたん）に依存して手遅れになれば、医学的（*いぎ）な介入（かゐん）ができなくなるかもしれません。

合成AIを「応援ツール」のように使うことを勧める専門家まで現れましたが、^④ 「壁打ち」だけではテニスの醍醐味（だいごみ）が味わえないのと同じで、それは基本的な会話力さえも奪う暴挙だと私は考えます。合成AIが子どもや世代に合わせた書き方ができるから話し相手になるというのも間違いです。機械の心はあくまでゼロなのです。

「友達とは、家族とは、そして人間とは何だろう」と問い続けている限り、まやかしのAIを相棒のように錯覚することなどなくなるでしょう。合成AIの利用で人間の脳が進化したり賢くなったりすることなど、科学的にありえないのです。実際はその逆で、「対話」という人間の基本的機能の **C** がAIの普及で現実起ころうとしています。

- * 合成AI……chatGPTに代表される生成AIのこと。
- * チョムスキー……アメリカの哲学者、言語学者。
- * 倫理……行動のルールなどの道徳的考え方。
- * 貶める……意図的に低い評価を与え、さげすむこと。
- * 第1章で紹介しました……本文より前の部分において、筆者はチョムスキーの発言を紹介している。
- * 詐称……事実と異なったことを言うこと。
- * 剽窃……他人の作品を自分の作品の中に無断で引用すること。
- * ドーピング……不正行為^{ふせいこうい}の一種。スポーツで選手が薬物などを用いて運動能力を高めること。
- * 自己欺瞞……自分で自分の心をだますこと。
- * 規範……判断や評価の基準となるもの。
- * 濫用……やたらに用いること。
- * 内向的……内気で、一人で悩みがちな性質。

問一 本文の A、B に共通する語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ しかし ウ 例えば エ または

問二 — 部①「デジタルデトックス」とありますが、これをおこなうことによりどのような効果がありますか。その説明として適するものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア デジタル機器の依存について改めて検討することによって、生活から機器を遠ざけることができる。

イ デジタル機器から遠ざかることで、本当の自分自身の実力に向き合い、人間らしさを得ることができる。

ウ デジタル機器を遠ざけることでリフレッシュされるため、人と会話する機会を増やそうという気になれる。

エ デジタル機器から遠ざかることで、人は失われていた自信を取り戻し、自己肯定感を高めることができる。

問三 — 部②「心理的負担が軽くなる恐れがあるのです」とありますがそれはなぜですか。説明しなさい。

問四 — 部③の空らんを埋め、四字熟語を完成させなさい。

問五 — 部④「壁打ち」だけではテニスの醍醐味が味わえないのと同じ」について次の問いに答えなさい。

(1) 「壁打ち」とはテニスなどの競技において壁に向かってボールを打ち、はね返ってきた球をさらに打ち返す一人でできる練習の形式を指します。これをふまえて — 部④とはどういうことかを「AI」という語を用いて説明しなさい。

(2) 本文の内容をふまえ、 — 部④と同様の意味となる例を考えて、答えなさい。

問六 次の文はある段落の末尾にあった一文です。この文が書かれていた部分として適切なものを【ア】～【エ】から選び、記号で答えなさい。

実際、隠れて試験に使えば、カンニングとみなされます。

問七 ★段落の文1～3を並び替え、その順序を答えなさい。

問八 C に当てはまる語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 退化 イ 実現 ウ 不足 エ 成長

三 次の1～5の文章の（ ）に適する語を、後の【語群】からそれぞれ選び、漢字に直して答えなさい。

- 1 わざわざ（ ）を立てるような物言いをしないでほしい。
- 2 あの監督の最新作は、現代社会に（ ）を投じた。
- 3 社長の（ ）の明によって、新しい事業が成功した。
- 4 祖父が（ ）にかけて育てた盆栽が賞を取った。
- 5 多くの人を救うため、彼女は新薬の開発に（ ）を注いだ。

【語群】 いっせき せんけん しんけつ ひだね てしお なみかぜ

四 次の――部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 駅でリョケンを發行してもらう。
- 2 ヤガイコンサートに参加する。
- 3 試合で力を出し切り、完全ネンショウした。
- 4 父に判断をユダねる。
- 5 お年寄りをウヤマウ気持ちが大切だ。

